

北海道新聞 2013年01月18日号

蘭越・チセヌプリスキー場

今季限り休止検討

「観光資源」惜しむ声

【蘭越】道内のスキー黎明期から山スキーが行われ、国際的スキーリゾートとなったニセコ地域の発展の基礎を築いた、後志管内蘭越町営のチセヌプリ（標高1134㍎）スキー場が今季限りで休止する危機にひんしている。ただ、愛好者には今も根強い人気があり、存続を求める署名運動も起きている。

チセヌプリや近隣のアモリツツと表現し、ニセヌプリ（同1308㍎）セコの名を全国に広め、1914年（大正3年）に北大スキー部が一本杖のスキーで滑走した歴史が残る。オーストリア・ハンガリー帝国の軍人レルヒ中佐が、道内にスキー技術を伝えた2年後のことだった。

また、山麓の温泉「国民宿舎雪秩父」は、28年（昭和3年）にチセヌプリに登山した秩父宮さま（昭和天皇の弟）が吹雪のため避難したことで知られ、施設名は秩父宮さまにちなんだ。当時の新聞は「極東のサン

存続求め署名運動も

スキー場の人気を集める。ただ、90年代前半に年10万人台だったリフトの延べ利用者数は、今では7〜8万人に減少。温泉の宿泊客も2011年度は7800人で、15年前と比べ半減した。このため町は検討委を

設置し、当面の収支を試算した結果、今季限りでのスキー場の休止と国民宿舎の取り壊しの検討を始めた。新たに温泉の日帰り施設を新設する方向という。

これを受け、スキー場存続を求める署名活動が活発化。プロスキーガイドの市村剛志さん（49）は「札幌市は自然が残り、観光資源としても貴重なスキー場を存続させた」と訴え、現地に置いた署名簿やフェイスブックで署名を集めて町に提出する予定だ。



今季限りでの休止が検討されている後志管内蘭越町のチセヌプリスキー場